

文学って何だろう？

理工系の大学では、文章力をつけるために本を読むことは勧めています。意識してアクセスしないと「文学」に触れることはほとんどありません。海外では工学系の学生が第二専攻として創造性を育む文学を学ぶ例が多いと聞きました。そこで文学部ではどのようなことを学べるのか検索していると、元大阪大学文学部長金水敏氏の言葉に遭遇しました。「文学部の学問が本領を発揮するのは、人生の岐路に立ったときと考える。苦難に直面した時にその苦難を客観的に捉える事が出来る。その苦難から自由でいられる人間の人間として自由であるためには直面した問題を考え抜くしかない。その手がかりを与えてくれるのが文学」というもので、これまで思いもなかった定義でとても腑に落ちました。

次にどのようにして本を読めば「文学」を体感できるか調べていて出会ったのが廣野由美子著「批評理論入門」(岩波新書)です。メアリー・シェリー著の怪奇小説「フランケンシュタイン」を読み解きながら小説の味わい方を解説した本です。これまで小説は面白いかどうかで判断していたのですが、読後は心の動きや時代背景なども意識して物語が立体的に見えるようになりました。これに味を占めて同著者の「ミステリーの間学」(岩波新書)も続けて読みました。この本には読書を通じて直面した問題を考え抜く視点が示されていました。

何はともあれ、まずは皆さんに興味を持った本を手にとって欲しいのです。何を読めば良いか思いつかない人には地元の直木賞作家、葉室麟さんの小説を勧めます。少ない登場人物で地元が舞台になっている作品が多く、映画を見るように物語が進展するからです。例えば「秋月記」「無双の花」「銀漢の賦」「散り椿」などが手に取りやすいと思います。巣籠もり時間が増える中、「人生の岐路に立ったとき」に力を発揮するだけでなく、本の話で思わぬところで人間関係が繋がることもある文学に目を向けてみませんか。

With コロナのデザイン

8月29日(土)朝6時半からRKB毎日放送「発掘ゼミ」で表題の番組が放映されました。本学情報デザイン学科の梶谷ゼミが「Withコロナ」の日常を自分ごととして、いかに楽しく過ごすかを形にしたプロセスを紹介した番組です。これまで「今までにない価値を創造し発信できる人材を育成するのが情報デザイン学科です」と説明しても何をやっているのか、なかなか伝えにくかったのですが、この番組では伝えたい内容の一端がうまく紹介されています。これまで経験したことがない「コロナ」という題材を使って、自分が楽しいか？快適か？などを判断基準に考えながら新しい日常の過ごし方を提案していく学生の生き生きした姿が印象的でした。

本学では工学とデザインの融合を掲げていますが、なかなか「その心は？」の部分が伝えにくかったのです。今回の放送で「With〇〇」というキーワードを使えばデザインの部分が明確になると感じました。それを形にするのが工学です。北九州市に本社があるTOTOの製品群に「融合」のいい事例があります。見た目のデザインだけでなく快適性や健康をキーワードにしてアクアオートや自動洗浄などの非接触技術が搭載された機種です。メジャーな例ではアップル社のiPhoneがあります。技術的に多機能を実現しただけでなくその洗練されたデザインや「自分ごと」の視点で設計されたタッチパネルやアプリは革新的でした。

日本は「With災害」列島です。本原稿を書いている今まさに、最強の台風10号が九州に近づいています。今や携帯電話はライフラインになっています。災害とどのように付き合っていくのかを考えたりするのも「工学とデザインの融合」の精神にピッタリです。

前例のない課題に対してこれまでとは違った多角的な視点から解決策を出すデザイン思考が出来る人材の育成。トライアンドエラーしながら大学一丸となって実現していこうと考えています。